

日本酒をテーマとした交流活動が中山間地域の住民にもたらす意義 Meaning of Activities on Theme of Japan Sake for Residents of Mountainous Areas

○佐野璃菜* 坂田寧代**

SANO Rina, SAKATA Yasuyo

1. 研究の背景と目的

少子高齢化や、都市部への人口流出が原因となり低下した農村地域の機能を維持する策として、地域と多様に関わる関係人口の存在が注目されている。各地域が関係人口の創出のためにさまざまな活動に取り組んでいるが、活動が継続不能となる地域も存在する。そうした中、活動を継続できる地域において、参加者は何に意欲を持って取り組んでいるのかを検討することが重要と考えられる。

そこで本報告では、新潟県中越地震で被災した新潟県長岡市山古志地区において、日本酒をテーマとして地震を契機につながった地域間の交流活動の二つの事例に着目し、中山間地域の住民にもたらす意義を見出すことを目的として調査した結果を示す。

2. 調査概要

山古志で行われている日本酒をテーマとした交流活動は、(1) 東竹沢公民館分館の住民(東竹沢地区住民)、長岡市青葉台団地の住民、および、関原酒造で取り組まれている日本酒「想ひおこせば」の雪中貯蔵、(2) 種芋原集落の住民(山古志営農組合が中心)、長岡市市街地の大手通商店街、および、お福酒造で取り組まれている日本酒「銘酒五十六」と酒米田の「五十六田」の交流活動ですべてである。

酒造会社(以下、「酒造」という)と地域の交流活動は他地域でもみられるが、二つの事例は地震を契機に地域間で活動が行われている点に特徴がある。聞き取りを中心とした現地調査を2022年6月～2023年7月に計13回行った。

3. 日本酒「想ひおこせば」の交流活動

3.1 活動経緯

日本酒「想ひおこせば」の雪中貯蔵は、仮設住宅の建設地の一つである長岡市青葉台団地の住民、および、山古志住民との間で2009年2月から始まった。「想ひおこせば」という名には、活動を通じてせめて1年に1回は中越地震を思い起こしたいという願いが込められている。活動の発端は、中越地震後に青葉台団地の近隣にある関原酒造が「山古志復興応援の酒」を販売し、利益を「山古志地域復興基金」に寄付したことがある。その後、2008年3月に関原酒造で火災が起きて酒蔵が使えなくなった。火災後、蔵の再建は未定だったところ、社長と個人的付き合いがあった人物が、酒蔵の代わりに冬期間に雪に貯蔵することを冗談半分提案したことがきっかけとなり始まった。毎回、雪中貯蔵の最後には集合写真が撮影され、瓶のラベルに使用される。写真-1は2022年に撮影され、2023年のラベルになったものである。また、雪中貯蔵と並んで継続している青葉台住民との交流田(食用米)活動は、青葉台山古志応援団のほうから山

*新潟大学大学院自然科学研究科 Graduate School of Science and Technology, Niigata University,

**新潟大学自然科学系 Institute of Science and Technology, Niigata University,

キーワード: 日本酒, 交流活動, 中山間地域

古志の避難住民へ、交流活動の一環として水田作業を呼びかけたことがきっかけで始まった。青葉台山古志応援団は、中越地震当時は青葉台に在住していた山古志出身の人物が呼びかけ、避難者支援や山古志と青葉台との交流のために結成された。当初は青葉台の交流田を利用していたが、山古志の東竹沢地区で借り手を探している休耕田を知り活動場所を当地へ移した。

3.2 活動における日本酒の役割

参加者が雪中貯蔵の活動に参加する目的は、参加者同士で交流したいためである。参加者の経歴は様々だが、人と関わる仕事に従事しており、交流から得られる発見や出会いを楽しんでいる点が共通している。参加者の中にリーダーシップを発揮できる人物だけでなく、人との交流を苦にせず行い、活動から自分の楽しみを見出だせる人物がいることが、活動を継続する上で重要であると考えられる。

雪中貯蔵を終えた日本酒の掘り出しは田植えとあわせて5月に行っている。単に日本酒を飲み宴会を楽しんでいるのではなく、田植えという力仕事を終えた報酬や、一連の酒造りを終えた成果物としても日本酒「想ひおこせば」は深い意義を持っている。

4. 日本酒「銘酒五十六」の交流活動

日本酒「銘酒五十六」は、長岡市大手通商店街の活性化を目的とし、近隣出身の山本五十六にちなんで大手通商店街振興組合が企画してお福酒造の製造のもと2009年から行われている。使用する酒米は、種芋原集落の山古志営農組合が栽培している。また、同集落に交流田「五十六田」を設けて大手通商店街の近隣中学校と田植えや稲刈りをしている。製造された日本酒は同商店街で販売されており、その宣伝は同商店街だけでなく山古志についても知ってもらうきっかけとなる。このように都市部の活性化に関わることで中山間地域に新たな役割が与えられ、多方向に知ってもらえるきっかけづくりになることから、都市と農村の新しい関わり方として有用であると考えられる。

交流活動の前身には、1997年から中越地震前まで継続されていたお福酒造と山古志営農組合による純米吟醸酒「山古志」の酒米づくりの取り組みがある。これは山古志の特産品のブランド化と地域活性化を目的に、山古志の米を使って酒をつくらうとしたが、山古志には酒造がなかったため、お福酒造に依頼したことに始まる。

5. まとめ

日本酒をテーマとした交流活動における日本酒には、酒を囲んで交流する際の「潤滑油」としての役割のほか、地域ブランドのPR商品としての役割を果たしていることがわかった。日本酒は、人々の思いを形にすることができ、また、人の手に渡ることにより、取り組み自体や参加者の思いを広めることが可能である。二つの事例はともに、地震と火事という「被害」が契機となり、山古志住民と地域外住民が交流している。参加者の強い思いのもと、10年以上にわたり続けられているため、参考になると考える。

謝辞 東竹沢地区住民、種芋原集落住民はじめとして多くの地元関係者諸氏にお世話になった。ここに記して心より御礼申し上げる。なお、本研究の一部は、JSPS 科研費 JP20K06293 の研究助成を受けた。



写真-1 雪中貯蔵後（2022年1月30日）
After sake storage activities in snow